

宝塚市自立支援協議会 専門部会「けんり・くらし部会（地域生活グループ）」  
令和2年度活動結果報告

I. 開催日時	【専門部会】	第1回	令和2年12月18日(金)	出席者	13名	14:00~16:15
		第2回	令和3年3月12日(金)	出席者	15名	14:00~16:00
	【ワーキング】	第1回	令和3年1月15日(金)	出席者	12名	14:00~16:00

## II. 要 旨

### 第1回けんり・くらし部会（地域生活Gr）(02.12.18)

#### 1. 前年度の振り返り

部会長より前年度の振り返り。

#### 2. 今年度のテーマの確認

前年度のテーマの『地域生活をする上で困っていることについて』を継続し、より深めていくことを確認。

今年度は、新型コロナウイルスが大きな出来事としてあった。コロナ禍での現状を共有し、困りごとや今後の期待など意見交換を行う。

#### 3. 意見交換

##### <合理的配慮>

障害や病気などでマスクが出来ないなどの実情があり、市域全体の合理的配慮が必要。

→部会での議論で止めずに、提案として協議していく。

##### <不安への寄り添い>

今日、明日どうなるか分からない不安な状況下でシングルマザーは仕事を休まないといけなが経済的にも不安があり、特に困った。

→アウトリーチの大切さを再確認。

##### <障害理解>

(例：医療的ケアが必要な人に) 必要な物資が届かなかった。

→理解を促すツールがあれば、障害分野だけではなく高齢分野にも有効。

##### <情報共有>

最初の頃は保健所にも情報が下りてこなかった。その中でもその時の最善の情報を伝えていた。今はだいたいシステムが出来ている。

→声に出すことが大切。

##### <サービス状況>

厚労省からも訪問系事業所へは防護服を着るなど感染予防策を講じた上で訪問することを通達。

##### <相談>

今までにないような難しい相談は増えている。家族も苦しいという変化を感じる。しかし、「一緒に考えましょう」というスタンスには変わらない。

相談を受けて、各機関や団体がバラバラに対応するのではなく、拠点的に集中できる『しくみ』『物理的場』の必要性。

##### <たからづか障害者応援プロジェクト>

コロナの影響で買い物に行けない、行きにくくなった方の支援として、ILセンターと宝塚市社会福祉協議会で立ち上げ。

## 第1回ワーキング(03.1.15)

### 1. 自己紹介

### 2. 前回会議の振り返り

部会長、事務局より前回内容の報告。

### 2. 精神障害<sup>がい</sup>の方が利用できる社会資源に関する冊子原案の最終確認

#### (1) 冊子確認

##### ①作成について

製本はB4サイズ用の紙を3つ折りではなく、半分に折り、見開きとする。

文字が小さくならないようにしてほしい。

##### ②綴じ方について

官公庁の種類を含め、文字が横書きで構成されている場合は左綴じが多い。

今回の冊子については、右綴じにしている（縦書きの内容もあるが、横書きが多い）が、綴じ方について、今までに議論があったかどうか？また、右綴じにするならば、縦書きよりも横書きの方が資料としては見やすいと思われるとの意見が出る。

⇒もともとは“不安を乗り越えて（あすなる相談事業所発行）”という小冊子を基本に作成をした。その冊子が左綴じであったこと、リカバリーストーリーが縦書きであったことを踏まえ、左綴じとした。なお、リカバリーストーリーを記載したものからの立場から言えば、横書きにするよりも縦書き（縦書き3段）の方が自分の想いが伝わると感じている。

#### (結論)

手に取った人が見やすい冊子作りが必要。

横書きの資料が多いため、右綴じで行い、リカバリーストーリーの題名を横書きとし、文章は縦書きで構成できるかなど、利用されている方が見やすいレイアウト構成を印刷業者と相談する。

##### ③内容修正

P1 2行目 「こじれて立ち行かなくなった人」⇒「立ち行かなくなった時」に変更。

P2～P6 用語集の文字の大きさをリカバリーストーリーの内容よりも小さくし、文章と用語集を区別しやすいようにした方がよい。

P7 「ピア電話相談に電話する」⇒「電話相談に電話する」に変更。

案) SNSで繋がろうという文言も入れてよいかと思う。

P12 宝塚健康福祉事務所の概要変更。精神障害<sup>がい</sup>者の医療というよりも医療に繋がっていない方の相談も行なっている。後日、変更内容を事務局に伝える。

#### (2) 配布先、配布部数について

ただ単に関係機関に送付・配置するのではなく、利用してもらえるように説明できる方に渡した方がよいと思う。

なお、自殺対策のチラシなどは、病院の待合室に置いてもらうように依頼している。待合室におけば、待合時間に見てくれる。そのため、多くの部数は必要ない（2冊程度）と思うが、設置型の方法もあると思う。

必要であれば、いつでも使ってもらえるように、冊子データをダウンロードできるのであればよい。

⇒印刷業者の了承（著作権などの問題）を得られることができれば、障害福祉課と相談の上、事務局（宝塚市社協）で掲載することは可能。

## 第2回けんり・くらし部会（地域生活 Gr）（03.3.12）

### 1. 前部会の振り返り

部会長より前回の振り返り

### 2. 全体会の報告ならびに質疑応答から理解を深める

宝塚市 障害福祉課 係長 本田より、『宝塚市における地域生活支援拠点等の概要について(案)』  
『障害福祉基金を活用した事業及び今後の事業内容』の資料をもとに、全体会の報告。その後、質疑  
応答にうつる。

#### <緊急時の受け入れ対応>

- ・市内の施設法人に短期入所を打診している。元々障害を受け入れているところなので、ノウハウはある。
- ・相談支援機関や緊急受け入れも必要だが、必要時に短期入所先がないこともあり、市内に短期入所先を作ることが大切であり、永遠のテーマである。

#### <相談の充実>

- ・一人の相談員がキャパオーバーになって対応が不十分にならないように、3層構造（基幹・委託・特定）で、一人一人のニーズをしっかりと考えていく。
- ・事例を共有し、分析することが大切。事例を通じて、課題や出来ていることを共有。
- ・7地区に地区割りがされるため、基幹と委託で会議はしていくだろう。7地区で同じ課題を共有し、市全体で課題として動く。また、1地区から課題や対応報告があがれば、基幹と残りの6地区で共有し、課題や対応のノウハウも共有していく。
- ・相談は入り口。出口がなければ課題も解決されない。入口、出口のバランスを取りながら、3層で振り合いではなく、手をつなぐ、バトンをつなぐことが大切。
- ・『医（医療）・職（『仕事』だけではなく、『居場所』『活動の場』を含む）・住（住居）』のバランスが取れていないと生活がずれる。サービスや就労だけを見る相談員ではなく、トータルで見れる相談員が重要と考える。

#### <合理的配慮>

- ・医療的ケア児がいる家族は、親が入院をして手術を受ける際も、医療的ケア児のケアが必要なため、入院の受け入れを拒否された（理解を示してくれる業種もあったが…）。結果的に家族が仕事を休んで医療的ケア児の対応をした。
  - 常に受け入れてくれるショートステイが必要。その上に緊急性がある。
  - 宝塚市立病院だけが、医療的ケア児者を受け入れてくれない。
  - ⇒改善をしていかないと大きな問題。一人の努力ではなく、組織としての仕組みも大切。なぜ、出来ないのかを協議会で確認の必要性がある。

#### 【本年度の部会開催の意義】

コロナ禍において、障害者本人・家族・関係者が置かれている状況について情報交換ができたことは有意義である。特に、時間の経過とともに状況が変化し、即応性が求められる内容も変化していたことが明らかになった。つまり、日常の課題が、コロナ禍においてより顕著な課題となっていた。今後も生活に密接にかかわるテーマを議題として、日常生活における課題克服に取り組むことが本部会開催の意義である。